古典

第13回

故事・寓話

推敲（すいかう）

講師
相原健右

学習のポイント

- 賈島は何を思案しているのか
- 韓愈の対応について
- 「推敲」は現在どのような意味で使われているか

理解を深めるために

今回学ぶのは、故事成語の一つである「推敲」のもととなったお話です。

故事成語は中国の古典をもとにして生まれた言葉のことをいいます。日本語の中で生きている故事成語は、例を挙げると切りがないほどたくさんあります。代表的なものとして、二字熟語では「杜撰」、「圧巻」、「蛇足」など。四字熟語では「五里霧中」、「呉越同舟」、「四面楚歌」など。そのほかにも「塞翁が馬」、「背水の陣」、「良薬は口に苦し」、「後生畏るべし」、「虎穴に入らずんば虎児を得ず」など熟語になっていないものもあります。皆さんにとっては、会話の中で使うには少し難しいと感じる言葉が多いかもしれません。その一方で「矛盾」や「完璧」といった言葉は、普段何気なく使っているのではないでしょうか。これらも実は故事成語。このように、故事成語は私たちの生活に溶け込み、言葉を豊かなものにしています。

日本語の中に故事成語が多いのには、もちろん理由があります。

日本は古来より、近隣の外国（特に中国）から文献を通してさまざまなことを学んできました。すなわち、日本人は古来より漢文を多く読んできたということです。そして、その漢文に書かれている物語や表現を、自分たちの言葉の中に巧みに取り込んだということです。故事成語について学ぶことは、実は言葉や文化の歴史を学ぶことにつながる、非常に大切なことなのです。

今回取り上げる「推敲」は今から千二百年ほど前、中国唐の時代の話です。唐は、一時は中央アジアにまで勢力を広げた大帝国です。国が勢力を増し、平和な時代が続くと、さまざまな文化が生まれ、発展します。唐の時代は、唐詩をはじめさまざまな文化が花開いた時代でありました。

ちなみに、唐はおおよそ三百年間、中国を支配しました。そのため、一口に「唐」といっても、時期によって文化の様子は変わります。唐は一般的に、初唐・盛唐・中唐・晩唐の四つの時期に分けますが、「推敲」は、中唐が舞台です。中唐は、内乱によって国が疲弊し、大帝国としての力を失っていった頃にあたります。

今回学ぶ「推敲」には、賈島と韓愈という二人の人物が登場します。韓愈は文人として大変著名な人物で、エリート官僚としての顔も持ち合わせていました。

このページの文書・画像の無断転載及び商用利用を固く禁じます。

一方の賈島は、元々は僧侶で、韓愈のすすめによって僧侶をやめて官僚となった人物です。歴史書『新唐書』では、この二人を師弟として記載しています。『新唐書』などいくつかの文献に、次のような逸話が残されています。

賈島は、洛陽という都市で僧侶をしていました。当時の洛陽では僧侶が日中外出することを禁止しており、それが賈島の詩作を難しくしていました。才能をふるえず思うままに詩を作ることができない賈島を哀れに思った韓愈は、詩や文章の作り方を教え、僧侶をやめて官僚になることをすすめました。

この逸話によれば、韓愈は早くから賈島の才能を高く評価していたことになります。ところで、この逸話と今回学ぶ「推敲」の話は、どちらが先の出来事でしょうか。「推敲」本文に、「挙に赴きて京に至る」とあります。そこから考えると、どうやら「推敲」のほうが後の出来事のようです。それでは、「推敲」の話の時点での二人の関係はどのようなものだったのでしょうか。おそらく、すでにお互いに面識があったと考えられます。この人間関係については「推敲」の本文には書かれていませんが、こういった背景を踏まえて「推敲」を読むと、内容の理解がより深まるのではないかと思います。

最後に、「推敲」で賈島が着想を得て、表現に悩んだ詩の完成した姿を紹介します。上の段に詩を、下の段には参考として詩の解釈を載せます。

題李凝幽居　賈島

閒居少二鄰並一　　静かでわびしい住まいに隣り合う家はなく
草徑入二荒園一　　草の小道は荒れ放題の庭へと続く
鳥宿池邊樹　　鳥は池辺の木にとまっている
僧敲月下門　　僧侶は月明かりの下、門をたたく
過レ橋分二野色一　　橋を過ぎても野原の気配を続かせ
移レ石動二雲根一　　雲のわく石を山中から移し据えている
暫去還來レ此　　しばらく離れていたが、私はまたここにやってきた
幽期不レ負レ言　　あなたとの約束、決して言に違うことはない

李凝の幽居に題す　賈島

（『全唐詩』）

第四句が、賈島が「敲く」か「推す」かで悩んだ部分にあたります。詩全体を見ることで、「僧」（賈島）が李凝という人の家を訪ねた理由が読み取れるかと思います。また、李凝の家の様子（山野を模した庭園のある家）や、僧が李凝の家を訪ねたシチュエーション（静かな満月の夜）についても想像することができるのではないでしょうか。さらには、知人の家の門を「敲く」のと「推す」のとで、その訪ね方にどのような違いがあるのか、そういったことについても、想像や考えを膨らませることができるかと思います。

皆さんがこの詩から読み取れたことを総動員して、皆さんなりに「敲く」と「推す」のどちらがよりふさわしいかについて考えてみてください。また韓愈が「敲くがよい」とした理由についても、改めて考えて頂きたいと思います。自分なりの解答を見つけたとき、文章を読む力が一段階レベルアップすると思います。

このページの文書・画像の無断転載及び商用利用を固く禁じます。

推敲

講師・相原健右

賈島赴レ挙ニ至レ京。騎レ驢ニ賦レ詩ヲ、得二「僧推月下門」之句一。欲二改レ推作レ敲、引レ手作二推敲之勢一、未レ決。不レ覚二衝大尹韓愈一。乃具言、愈曰、「敲字佳矣。」遂ニ並レ轡論レ詩ヲ。

（唐詩紀事）

書き下し文

賈島、挙に赴きて京に至る。驢に騎り詩を賦して、「僧は推す月下の門」の句を得たり。推すを改めて敲くと作さんと欲し、手を引きて推敲の勢を作すも、未だ決せず。覚えずして大尹韓愈に衝たる。乃ち具さに言ふに、愈曰はく、「敲の字佳し。」と。遂に轡を並べて詩を論ず。

古典

第13回

このページの文書・画像の無断転載及び商用利用を固く禁じます。